
二里凜の人格診断

ryou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二里凜の人格診断

【Nコード】

N9163T

【作者名】

ryou

【あらすじ】

常識から外れた存在は人間とは呼べなくなる。例えば人を喰らう食人鬼。例えば血を吸う吸血鬼。常識を外れて人を襲う者を、人間は化物と呼ぶ。

二里凜はそんな化物に殺され、常識から外れてしまう。自己蘇生という結果をもって。

arcadiaさんのほうでも投稿させて頂いてます。

冒頭

薄暗い路地裏を、頼りない電燈が月の代わりとばかりに照らしていた。

雨雲に覆われた夜の空。闇が降ってくるような、冷えた空気が路地裏を包んでいる。

そこを、走る少女が一人。

背中まで流れた黒髪を振り乱し、息も絶え絶えのまま、それでも全力で走り続けていた。

切れ長の凜とした瞳も、今は歪んでいる。ときおり後ろを振り返りながら、先の見えない回廊をひたすらに走り続ける。

出口はまだ見えない。

とつくのとうに限界は超えている。心臓は馬鹿になったような音を上げ、呼吸は十分な酸素を吸入できていない。

しかし、何者かから追い立てられる恐怖は、限界を感じさせないほどに、大きかった。

着ているセーラー服とスカートが翻ろうとも、意にも返さない。

今はただ、その恐怖から逃げ出したかった。

角を曲がったところで、少女はやっと立ち止まった。

体全体が脈打つような疲労感。少女、二里凜は座り込みたい衝動を抑えながら、コンクリートでできたビルの壁に背をつけた。

こんな道、通るんじゃないかった。

後悔の念が心を埋めた。凜が空を見上げる。

そう。雨だ。雨が降りそうだった。

それだけの理由といってしまうとあまりに粗末だ。しかし凜は帰宅を急ぎ、近道になる路地裏に入った。それが悪夢の、夢でしか味わったことのない、死ぬかもしれない恐怖の始まりだった。

凜は見ってしまったのだ。コンクリートの灰色に包まれているはずの路地裏が、壁と地面全てが赤く染まった景色。異様な臭気を放ち

転がる、人だった破片たち。何人だかを判別することはできなかった。揃わない耳や、みかんのように剥かれた頭皮。手足がオブジェのように捨て置かれ、五臓六腑が撒き散らされていた。凜が見たのは、およそ人間とは思えない死体。それと、それを行った男の顔を。男の顔は、鼻先から口元までが真っ赤に染まっていた。男は血の海にしゃがみこみ、破片を拾い集めては夢中になってそれを喰らった。

凜はただ、その光景を呆然と見つめていた。日常とかけ離れた非常識を目の当たりにして、凜の脳は完全に動きを止めてしまった。

目の前にいるのは確かにヒトの形をしているが――

――あれはバケモノだ。

そして、ようやく気を取り戻し、来た道を全速力で戻っていった。走っている間中、追いかけてこないかと怯え、今も角から化け物が現れないか、怯えている。

呼吸はまだ治まらない。立ち止まったのは失敗だったな、と心中で舌打ちした。足が震えだしていたのだ。疲労か、恐怖か、そのどちらともだろう。きつと、今を襲われたなら、逃げることはできないだろう。ただじつと、生を諦めることしか、許されないだろう。だから、凜は祈った。目の前に、あの化け物が現れないように。ぽつ、ぽつと、凜の顔に水滴が落ちた。空を見上げる。

ビルとビルと隙間から覗く小さな空。そこに敷き詰められた黒雲が、ついに振り出していた。一気に雨が強くなっていく。周囲の音は、水がアスファルトを叩く音だけに支配された。

そろそろ動くべきだ。そう思って、凜が壁から背を離した。そのときだった。

凜の肩が、背後から掴まれた。背中と壁とは、数センチしか開いていないにもかかわらずだ。

凜の肩を掴んだ手は壁より生えていた。水のように波紋をたたせ、

その手は次第に伸びていく。獣のような尖った爪が、万力のように肩を締め付け、彼女を逃がさない。

水面から浮かび上がるような形で、壁の中から、口元を赤く染めた男の顔が浮かび上がっていった。

男はニヤリと表情を歪め、人のものではない鋭い牙を覗かせている。

男は、凜の耳元に顔を寄せて、囁いた。

「逃がさない」

底冷えするような暗い声だった。

壁からもう一本の腕と上半身が現れ、凜の顎を強く掴んだ。強引に首を倒し、男が凜の首筋へ舌を這わす。

不快さを感じるよりも、牙が皮膚に触れるたびに恐怖を感じた。

ナイフをあてがわれてるような気分だと、凜は思う。

ナイフとの違いは、脅しの類ではないということだけ。

死がすぐそばまで近づいている。

それも、およそ人らしさとは無縁の死に方だ。

凜が見た、人間であったものの破片と同じように。元が人間だと想像もつかない姿にされる。

ただ死ぬ事実よりも、凜はそれを恐れた。

せめて、人らしく死にたい。

雨に濡れた凜の肌に、男が牙を立てた。

途端、雨音の中に、硬い靴音が響いた。

縫るように、凜は視線をそちらへ向ける。

レザーパンツと灰色のタンクトップ。どこかみすばらしい雰囲気
の男で、しかし体格までがそうかというと違っていた。格闘技をや
っているような、しっかりとした筋肉がついた長身の男だった。

傘も差さずに現れた男は、凜の襲われている状況を見ても、然し
たる興味も見せず、何より視線は常に、壁から生えた男を見ていた。
「なんだ、お前。やけにのんびりとしているじゃないか吸血鬼。い
つもは喰ったあと、すぐに消えうせるってのに、今日は食後のデザ

「トときたか？」

吸血鬼と呼ばれた男は、その言葉に反応を示さなかった。吸血鬼よりも、凜こそがその言葉の意味を考えていた。

人が来たことにほんの少しの安心を感じていたが、それが霧散していくのがわかった。

こいつは、この長身の男は、首筋を噛み切ろうとしている男と本質が同じなのだ。

長身の男は無造作に凜たちへと歩を進める。五メートルほどまで近づいたところで、吸血鬼がようやく反応を返した。

「それ以上近づくな、餓鬼」

吸血鬼が彼女の首から口を離し、言った。男は素直に立ち止まり、軽く顎を持ち上げた。見下ろすように視線を、吸血鬼へと向ける。

「どこから来たか知らないが、ここは俺の餌場だ。何より吸血鬼なんて厄介な奴がそばにいたんじゃ、迷惑ってもんだ」

男は凜の存在を無視したまま、続ける。

「お前はたまに喰い残すだろ。それが堪らなく迷惑だ。魔術師たちや、坊主どもに気づかれてこの町に来られたんじゃ、それこそばつちりだ」

言って、男がまた一步を踏み出した。

それを見た吸血鬼は、凜の首筋を噛み切った。

皮膚を、肉を、動脈を、神経を、全て一緒にして飲み込む。

少女――凜は痛みを感じる暇もなく、ただされるままだった。

声を出そうと思っても、すでに発声するための息を吐けない。自らの首が半分以上なくなったというのに、状況が理解できず呆けた顔のままだった。骨の見えた首からおびただしい血液が溢れ出し、周囲と少女を染めあげた。

同時に、吸血鬼は壁に飲まれていた。先ほどとは違い、今度は自らの体を、壁に沈ませていく。

「だから、喰い残すなって言っただろう」

長身の男は、五メートルの差を一息で詰め、少女がいることを意にも介さず、掌底を放った。

それは最初に少女の胸を抉り、心臓を破り、背骨を砕き、終いには体突きぬけ、少女の背後にいる吸血鬼を襲った。

しかし、それは吸血鬼には届かない。吸血鬼はすでにそこにはいない。掌底はビルの壁に穴を穿ち、止った。

「逃げ足だけは毎回うまいな。まったく」

男は、突き出した腕に刺さったままの少女を、腕を振るって抜き捨てた。軽い身体がアスファルトにぶつかり、転がっていく。

雨は血肉を洗い流し、その色は次第に広がって、そして消えていった。

其処がどこかはわからない。

暗く、何も見えない世界。何もない世界。私がいても、私の体は存在しない。概念だけの昏い世界。粘液の中にいるような、おぼつかない感覚。

私は覚えている。

首を噛み千切られたこと。心臓を貫かれたこと。それを思い出して、ここがどこかも想像がついた。

きっと、ここが『死』なんだ。

自分という概念が、だんだんと奪われていくような、雨に流される血液と同じ、希釈されていくような感覚。

私の魂は、いつかはこの世界へ消えていく。そんな気がするのだ。ここは広すぎるのだらう。果てのない、遠い境界。だから、ここには何もないのだ。何もないことこそが、そこに存在することを許

さない。

広大な世界で、一人きりというのが苦しいように。

しかし、私は一人ではあるのに、一つではないような不協和音を感じた。

そう、六つだ。

六つの光がそこにあつた。その全てがきつと私。

その一つ一つが私を構成する欠片で、それが一つになって初めて二里凜なのだ。

その欠片が一つ、私から離れていく。

それが何なのか、私にはわからない。

それを拾い上げたくても、掴むための手がなかった。それを追いかけてくても、走る足がなかった。

離れていく欠片を愛しく眺めながら、別れを告げるだけ。

いや、それが離れていくのか、私が遠ざかっているのか、その確証さえ得られない。

欠片が見えなくなった頃に、闇が明けた。

色彩を持った大きな奔流が目の前に現れる。私は、その暴力的な奔流に飲み込まれていった。

その中で、思う。

——きつとあれば、心の欠片で、失くしてはいけなかったんだ。

そして私は目覚めたのだ。鮮烈に、有体に死を実感しておいて、私は再び生きることを始めてしまった。

目覚めて飛び込んできた世界の光は、あまりに乱暴なものだった。いつから目を開いていたのか定かではない。しかし、眩しいと感じたのは今だった。

私は、生きている。

それが不思議で、そして喜びを感じない自分が不思議だった。

私はパイプベッドの上に寝ていた。

煙草臭く、埃っぽい。黄ばんだ天井と壁。扉は一つ。ベッドの上に窓があり、そこから日差しが入っていた。ベッド以外には、机と、その上には花が飾られている。壁際には何も入っていない棚が置かれた部屋だった。

こんな場所を、私は知らない。

上半身を起こそうと力をいれると、全身に痛みが走った。どのくらい、寝ていたのだろう。いや、どのくらい死んでいたのだろう。全身の痛みと、酷い空腹とが私を支配している。

「やっとお目覚めか、二里凜」

扉から入ってきた男が、軽い調子で言った。

目元まで前髪で隠した怪しい男だった。声色から察するに、二代後半を思わせる。

「……誰だ、あんた」

にはらい

「八郎十郎。お前の親戚、六洞家お抱えの医者だ」

口元に笑みを浮かべたまま、八という男は机の前の椅子に座った。「ん、知っているだろう？ 二里家の家元にあたる名くらい」

六洞家は確かに知っていた。親戚なんて軽くいえないほど、大きな家だ。なるほど、あの金持ちなら医者くらい抱えていてもおかしくはない。

「いや、驚いたけどね。まさか死体が道を歩いているなんて誰が思う。それに――」

「待て。私は何で生きている」

八は着ている白衣の内側から煙草を取り出し、一本を噛み、火をつけた。

「死んだはずだって？ 確かに、お前は死んでいたよ。どうやって死んだかは知らないがね。恐らく胸部に大穴を空けているはずだ。だが、お前は蘇生した。まあいい。ここは後々説明するでしょう。

今は何より食事だ。見てのとおりここは、俺の仕事場、八医院ではあるが、治療機材は何もない。そして、死んでいるお前を見つけて今日、一月三日まで一週間がたっている。腹が減っているだろう？ 寝ている間、何も食わせていないからな」

紫煙を燻らせながら、八は笑った。

医者と名乗っておきながら、なんて怠慢、と思う。

「どれ、飯でも取るか。ん、待てよ。お前は粥くらいしか食べられないか……」

携帯電話を片手に八は動きを止めた。悩んだ末に、私を見つめて一言。

「お前、粥作れる？」

「いや、すまんね。料理はまるで駄目なんだ。俺は男だし、何より金は困らない程度にもっている。手間を惜しんで金を使う生活しかしていないんだ」

結局、私は食事を自分で用意することになった。痛む体を苛立ちでごまかし、なんとか拵えた。八が自分の分をせがんだが、無視した。あいつが今食べているのは、出前の蕎麦だ。

立ち上がって気づいたが、私は今、患者衣を着ていた。それを八に尋ねると、意にも介さず「着ていた制服は脱がして捨てた。胸元

にでかい穴が開いていたからな」といった。八の話では、新しい制服を買ってあるとのことらしい。

「でだ。お前はいつたい何に殺された。胸に穴が開くほどの傷だ。事故なんかじゃないだろう？　それほどのことなら、俺の耳にも入る」

死因を問われて、答えていいものかを考えた。化け物に殺されたといったところで、果たして信用するだろうか。

しかし、その思惑は杞憂に終わった。その話を聞いた八は、当たり前のように頷いた。

「化け物か。なるほど、それで納得がいった。首元を噛み切ったのは恐らく吸血鬼で、お前の胸を貫いたのは鬼だろう。」

簡単な話だ。お前を襲ったのは吸血鬼のほう。これは、ただ食事のつもりで襲ったんだ。

鬼のほうは、首を噛み切られただけのお前を確実に殺すように心臓を貫いたんだ。何、これも悪意から来るものじゃない。

吸血鬼に噛まれた人は、簡単な損傷では生き返ってしまう。リビングデッドという奴だ。それを嫌って、鬼はお前の心臓を貫いたんだ。死体を、完全に壊すためにね。まあ、どちらにしろ鬼も、正義の味方なんかじゃあないから、それが善意からだろうと悪意からだろうと関係はないんだがね」

「なら今の私は、なんなんだ。リビングデッドという奴なのか？」

「それは違う。もしそうなら俺が殺しておくし、何より日光を浴びても平気だろう。」

お前、眠っている間に何をみた？　それが、答えた。俺から聞いても意味がない。自分で理解するべきだ」

まるで謎かけだった。知らないことを自らの内側から理解しろとはなんて難しい、と私は思った。

「そうだ。大事なことを忘れていた。これからいくつか質問する。よく考えて答えろ。お前の名前は？」

「二里凜」

「年は」

「十七」

考えるまでもない事柄だった。なんの為の質問かすら理解ができない。

「なら、これはどうだ。殺されたのはお前だったか。本当にお前は二里凜か？」

その言葉は、今までの質問とは違い、心の中へ静かに落ちていった。

私は本当に二里凜か。私は本当に殺されたのか。

しかし、そこに違和感はない。私は二里凜で、殺されたのは確かに二里凜だ。

それを答えると、八は口元に手をあて、静かに頷いた。

「六洞の分家が発現する……か。六洞の当主が聞いたらなんと言うやら。まったく飛んだ皮肉だ。しかも六家より外の血からか。六家の生まれならまだ納得がいったというに。いや、むしろ当然といふべきか。まあいい、二里凜。このことは、一切口外するな。親族には特にだ」

「いわれなくても誰がしゃべるか。死んで、生き返ったなんて、笑い話にもならない。いったところで、誰も信じはしないよ」

八は、いいやと首を振った。

「誰もじゃない。確かにすぐには信じないだろう。だがな、六洞という家系と、それに連なる家系はそうじゃない。確証を得られれば、信じるのさ」

「お前はうちの家系を、変人か何かと勘違いしてないか？　うちは至って普通だよ」

「普通？　あれが普通ときたか。お前は六洞の人間と、その直系である六つの分家と会ったことがあるのか？　あそこは異常だよ。異端の権化だ。起源こそが異端なんだ。始まりこそが異端。あれはそうあり続けるようにしている。もとより人間を生み出そうなんて考えてもいないのさ。お前の血はそこから離れてはいるが、しかしそ

れを含んでいるんだ。だからこそ、蘇生した。その蘇生が、本当に救いなのかは分かんがね」

人間でないのなら、なんなのかと思ったが、八に問うことはしなかった。もし、それを聞いて、返ってくる答えが――

――化け物であるなら。

死んでも生き返る人間を、人間とは呼ばないだろう。分かっている。私自身わかつてはいたが、それを言葉で聞くことは我慢できそうになかった。



私が目覚めた日から一週間が過ぎた。

入院という形で八郎十郎との奇妙な共同生活を続けていた。

私の体が痛みを発することはやっとなくなった。郎十郎の話では、もう退院していいとのことだった。

落ち着いて観察すると、ここがただのマンションの一室であることがわかった。八医院など名ばかりで、2LDKの一室に私を押し込めていただけだ。なによりこの一週間、郎十郎が医師らしいことをした覚えがなかった。

机の上の花は、水を変えなかったのか茶色に染まるほどに枯れていた。

郎十郎が用意した真新しいセーラー服に着替え、窓の外を見た。雨が降りそうな、嫌な天気。

「着替え終わったか。退院祝いだ。何かほかにほしいものはあるか」扉を開けた郎十郎は、前髪で表情を隠した顔をこちらへ向けた。私はふと、考えもせずに言葉が漏れた。

「傘。傘がほしい」

郎十郎は煙草を取りながら、聞き返した。

「そんなものでいいのか。それなら玄関にビニール傘がある。あ、いや待て。あれはダメだ。確かあっちに趣味の悪い傘があったはず……」

そういつて郎十郎は部屋をでて、別の部屋へ入っていった。物を動かすガサゴソという音が聞こえてくる。あまり整理のできた部屋ではなさそうだった。

帰ってきた郎十郎は、片手にでかでかと唇が描かれた傘を持っていた。

「これをやる。どっかの誰かが置き忘れてった物なんだが、俺は要らないから」

確かに趣味の悪い傘だった。拒否する間もなく郎十郎が私の手に傘を押し付ける。

「返品不可ってことでよろしく」

「……」

黙っている私を見て、郎十郎はフツと笑った。

「そういや最初にお前は二里凜かと聞いたな？ お前はそうだと答えた。だが、あれは間違いだ。お前はもう、二里凜じゃないよ。そのうち分かる」

「私は私だ」

「そうじゃない。物事の認識っていうのは、自身で行うものじゃない。自分が自分であるという認識は、確かに自分自身で行うことも重要だが、それを決定づけるのは常に他者だ。お前は変わっていないと思いつけてもいい。だが、周囲はそう見ちゃくれないという話だ。その癖、他者の意見に流されて、自分を見失ってしまうと、自分を殺すことになるんだがな。厄介な話だろ。他者は常に、自分を殺しにかかってくるんだ」

「他人の意見なんて、求めちゃいないよ」

「ま、それでいい。もうそうするしかないだろうからな。お前の自宅へは連絡なんてしてないから、帰ったら大変だろうけど、まあ適

当に誤魔化しておけ。男の家を渡り歩いて淫蕩に耽ってましたとも言え、五割の親は追及できずに疎遠となつて、残りの五割が涙に暮れて道を正そうとしだすさ。君の親がどっちは知らないが。あ、もしかしたら色情に落ちた娘を襲う父親もいるかも知れんな。ほら、父親にとって娘とは恋人と似たような物である場合が多いし。五割の確率で詰らん追求を避けられるならうまい手だと思わないか？」

「気持ちの悪いことを言うな。そんな馬鹿な話するわけがないだろう」

ドアの前に立つ郎十郎を突き飛ばすように押しのけて、部屋を出る。狭く短い廊下を右に曲がり、玄関へ向かう。

あの日、履いていたローファーとは別の、また新しいものを履いて、玄関を開けた。

「では、達者で。これは忠告だが、もう死ぬなよ。死なない命はない。少なくとも、破滅は向かつていくぞ」

振り向いて、郎十郎の顔を見た。

「言われなくても、もうあんな経験はこりごりだ」

「そのうちにまた会おう。診察も含めてな」

診察なんて。藪医者のくせに。

言い残して、郎十郎が部屋へと戻った。さっさとこんな場所から出て行こう思った矢先、玄関先の傘立てが目映った。立てられているのはビニール傘が一本。私は手に持った趣味の悪い傘と見比べた。

返品は不可。郎十郎はそういつていたが、この傘、ここに捨てていくのなら返品には当たらないだろう。

趣味の悪い傘を傘立てにさし、ビニール傘を手を取った。雨が降ったらその趣味の悪い傘、郎十郎が差すのかと考えると、少しだけ気分が晴れる。

そうして、ようやく私は八医院を出て行った。一週間ぶりの外の空気。大して思うところがあるわけでもない。どちらかというと、

足取りは重かった。それは別段、ここに居たいわけではない。ただ、家に戻るのが億劫なだけだった。

立秋昭人

一

新学期が始まり、まだ休みボケの抜けきらない頃に同級生が一人学校を欠席した。誰もそれに特別な関心を向けなかったが、その子がそれから五日を続けて欠席してから、教室では一つの噂が出回った。

曰く、最近この六月町で起こっている連続殺人に巻き込まれた、と。

その事件が始まったのは、去年の十二月の頭からだった。クリスマス前のニュースは、この町の話題で持ちきりだった。しかし一月も過ぎると、時折来ていた中継車も見なくなつたし、こんな都の場末にある住宅街にわざわざ来ていた街頭インタビューも消えた。

それでも、事件自体が消えた訳ではない。

十二月から今日まで、報道された事件の数は五回目。新学期の初めにも一回、事件はあった。恐らくそれに巻き込まれたのではないか、という話だった。丁度時期は重なるらしい。

といっても、もしそうなら葬儀の話くらい、学校に回ってきそうだ、と俺は不謹慎ながらに考えていた。

そうして二月に入りすぐの頃、欠席していた同級生、二里凜が学校に来ていた。どこかしらを怪我した、という訳でもないようで、至って普通のまま、いや、晴れているのに傘を持っているのが少し不自然に見えるが、それ以外は今までと変わらぬ姿で現れた。当然、好奇の視線をクラス中から浴びていたが、彼女は無然とした面持ちのまま、その日を過ごした。

今日この日の印象だけを言うならば、ある意味では超然としていた雰囲気を持っていたと思う。普通ならば少なからず視線に怯えるか、不快な表情をするかくらいの反応は見せるだろう。が、彼女は

周囲をまったく気にする事もなく、平然と過ごしていた。果たしてそのような人物だったか、と俺は疑問を持った。

噂のせいで目立っているだけ、とも思ったが、思えばどこか、彼女の纏う空気自体が妙に悪目立ちしているようにも思える。

そのような人物であるなら以前から、いや、クラスが同じになった日に何かしらの印象を受けていたと思う。今日の授業はもう終了している。二里凜もすでにいない。部活動も事件のせいで中止だ。

俺は明日、話しかけてみようかと考えながら帰宅した。

二

私は八医院を退院してからすぐ、別の病院へ行く事となった。両親の計らいでだ。

あの日、家には母親がいた。帰ってきた私を見て母親が泣いてしまい、どうにか泣き止むようにと他愛もない話をするうちに段々と表情は硬くなっていた。

私が母親にどうかしたのか、と尋ねると、母親は、「どうしてそんな男の人みたいな話し方をするの？」と返された。

私は、事件の前と後で話し方や、雰囲気、つまり人当たりというものが変わってしまったらしい。

しかし、私にはその実感がまるでなかった。以前から私はこうだった、という気がしてならない。

私は、郎十郎の言葉を思い出した。

“そーいや最初にお前は二里凜かと聞いたな？ お前はそうだと答えた。だが、あれは間違いだ。お前はもう、二里凜じゃないよ。そのうち分かる”

これがそうなのだろうか。これが自身と他者の認識の違いなのか。

私は母の問いに答えることができなかった。なぜ、と問われても困る。

すると、今度は性同一性障害なのではないか、という疑いを掛けられてしまった。

父親が帰宅し、母親のときと似たようなことを繰り返して、その翌日に私はカウンセリングを受ける事となった。

私が性同一性障害ではない事はハッキリしている。私は自分が女だと認めているし、男になりたいわけでもない。体と心の性は一致している。言葉遣い一つで疑われてしまっても困るのだ。一週間近くの急な失踪も多分に影響したんだと思う。

しかし、それとは別に自分の中で、一つの問題が生まれていた。

母は私が帰ったときに、涙を流していた。

一体なぜ母が泣いたのか。

私はそれが、まったく理解できなかった。

たったそれだけの事が、ポツカリと穴が開いたように、理解できなかったのだ……。

両親からの通院命令がやっと解けて、漸くと落ち着いた生活へ戻った。学校を終えて、私はそのまま、今度は自発的に病院へ行くつもりだった。

病院の名を、八医院。

変哲も無いマンションの一室。怪しい男のいる部屋。もとより、私にはあの男が医者と名乗る事自体に疑問に思うが、私はアイツと話がしたかった。

手には文房具の入った鞆と、黄色い傘。郎十郎から奪い取ったビニール傘でよかったが、今朝傘立てを見ると、ビニール傘がなくなり、代わりにこの黄色い傘が置かれていた。

私は外に出るときに、傘を持ち歩くようになっていた。別にお気

に入りという訳でもなく、傘なら何でも良かったので黄色い傘を持ち出した。

二週間前に通った道に戻り、例のマンションへ。L字型の、一般的な六階建てのマンションだ。八の部屋は六階の角部屋。エレベーターに入りボタンを押す。

エレベーターの壁が少し傷ついている。そういえばマンションの外壁も汚れた乳白色をしていた。金もっています、なんて馬鹿なアピールをしたあの男らしくない住居のように思う。

エレベーターを出て角部屋の玄関の前まで来た。表札には誰の名前も書かれていない。

呼び鈴を一回鳴らして、ドアノブに手をかけた。鍵は掛かっていない。

ドアを開けて、中に入る。傘を傘立てにさした。あの趣味の悪い傘も置きっぱなしだった。靴は脱がずに、そのままアイツの部屋のドアを開けた。靴の上から砂の感触が分かるほど床は汚かった。

「よう。久しぶり。だが勝手に上がりこむのはどうなんだ、それ」
迎えたのは変わらず、前髪で目元を隠した男、八郎十郎だった。

私が前に寝ていたパイプベッドに腰掛けて、郎十郎は煙草を吸っていた。

私は部屋には踏み入らず、ドアの前から郎十郎を睨んだ。

「何だよ怖い顔して。何か聞きたい事があるからここに来たんだろう。さあ、問診といこうか」

「それ、問診ならそっちから聞くべきじゃないのか？」

「なら問おう。実感はしたか？ 自分が二里凜ではないと」

「――前まで理解できた事が分からなくなっている。ごく当たり前な事なのに」

郎十郎が顎に手を当てながら煙を吹いた。

「ほう、自分の異常な場所は理解できてる訳だ。馬鹿だなそれ、異常な場所なんて自分じゃ理解できてないほうが楽なのに。で、何が分からないんだ？ それによって色々分かってくる。」

例えば愛情が分からない。例えば怒りが分からない。例えば人の言葉を聞けない。例えば善悪分らない。例えば意欲が分からない。でもあれだな。きつと愛情という所だろう」

私は特に郎十郎の言葉を否定しなかった。そういうのならそうだろう、とさえ思っていた。

「まあ、自覚してくれて何よりだ。無自覚の異常者というのは、自身は楽だがその分、他者に色々なものを押し付ける。良かったじゃないか。全て自分で背負い込む事ができるぞ」

「それで、問診の結果これは何なんだ？」

「感情の欠落。死んだ時に魂を分割して生き延びたんだろう。分割した魂があと何個かは分からないが、死ぬ度に何かが欠落していくという事だ。果てさて、何回目で死ぬるのだろうか」

「あと五つだ」

「何？」

「夢で見た。いや、夢かも分からないけど。六つの光りが一つ消える、そんな夢」

「総数は六か。出来すぎだな。まあ、それなら話は早い。一回くらいならまだ平気、とは言わないが致命傷じゃないだろう。以前との差異が気になるだろうが、気にしすぎない事だ」

問診終了、と郎十郎は今まで吸っていた煙草消して、新しい煙草に火をつけた。私がそれを見ていると、まだ話があるのか？ と郎十郎が言う。

「……お前、何者なんだ。医者なんて嘘だろ。こんな場所、命を救う場所には見えないけど」

「命を救う？ そりゃそうだ。俺は救わないよ。いや、六洞のお抱えだからな。呼ばれて言っ、診察して、つまり訪問専門だ。それにしたって救うなんて事はできないが」

「藪医者」

「お前、今日ここに来て、何かしら救われたか？ 逆に聞くがお前は どうしたら救われるんだ？」

俺の相手する患者はそんな奴らばかりさ。怪我もなけりや病氣もしてない。強いて言うなら心の病氣。それも、脳内麻薬の分泌程度じゃどうにもならない次元の話だ。そんなんじゃ薬も意味がない」

「六洞には私のようなのが？」

「全員じゃないがな。そういう家系なのさ」

そこで話を区切って、郎十郎が立ち上がり、今度はパイプ椅子に腰掛けた。

「それよりお前、一体いつまで部屋の入り口にいるわけだ？　まだ話があるならそこらへん座れ」

「いや、もういい。帰るよ」

「そうかい。ああ、そうだ。お前、俺がやった傘あんな所に置きやがって。まさかとは思うが、傘立てに置いておいた番傘、持って行かなかっただろうな？　あれただの傘じゃないんだよ」

番傘なんてあの傘立てにあっただろうか。あったのはビニール傘が一本だけ。というより、番傘は傘立てに差しているのだろうか。

「番傘なんて知らない。それに、お前が寄越した傘はあそこに捨てたんだ。返品でも置いた訳でもない」

「……人の家にゴミを捨てるんじゃないよ、お前」

なんて腹の立つ物言い。そのゴミを寄越したのは一体誰なんだか。

翌日、普段通りに学校へ向かう途中、雨が降り出した。私は手に持っていた赤い傘を差して、学校までを歩いていった。

そう。今日は赤い傘だった。玄関の傘立てに昨日差した黄色い傘はなくなって、今度は赤い傘。それより前のビニール傘も戻ってこなかった。

果たして誰が持ち出しているのか。私より先に家を出るのは父親だけだ。別に私が使う分を残してあるのなら構わないが、なぜ日替わりで傘が変わるのか、少しだけ聞いてみたかった。

学校へついて、私は水を払ってから、教室まで傘を持っていた。何故だろうか。私は傘を常に手放したくなかった。といっても自宅では違ふのだが。

この公立高校はお世辞にも進学校とはいえない所だ。どちらかというと生徒もお行儀が良い人より悪い人のほうが多い。傘なんて高価ではなさそうなものなど、気軽に盗まれてしまうのだ。

私は一階にある自分の教室、一年A組に向かった。

あの事件から二回目の学校。昨日今日と、クラスメイトは妙に遠巻きから私を見ているだけだった。なにやら動物になった気分だったが、今は逆にそれが助かる。また両親の時と同じような、以前の自分との違いを見抜かれてしまうのは面倒事だ。席に座っておとなしくしておくに限る。

そんな私の心配をよそに、今日この日は朝から話しかけられてしまった。

「二里さん、久しぶりだな。休んでたけど、どうかしたの？」

クラスメイトの男だった。私は彼の名前をよく覚えていない。

そう考えたのが顔に出たのか、男は少し笑ってみせた。

たてあきあきと

「立秋昭人。よろしく」

「よろしく。休んでた理由なんて別に、少し病院へ行ってただけ」

私が窓際の自分の席へ座ると、立秋も追いかけてきて、私の前の席へ座った。果たしてコイツの席だったろうか？

「そっか。どこか悪い所でもあったの？」

「別になかった。両親が無理やりつれてったんだ」

そういうと同時に、予鈴が鳴った。すると立秋は、すっと立ち上がって、一言残して自分の席へ戻っていった。

「そっか。んじゃ俺は席戻るから、また後で」

彼は廊下側の席だった。また後で、という事はまた来るということだ。

きっと彼は私に違和感を持ったのだろう。だからそれを確かめようとしている。そんな気がした。

一限目の数学の授業を受けながら、考えていた。どうやったら余計な首を突っ込ませないようにするかを。

以前の私の振りをする、という事はできない。私は以前までの自分を覚えていないからだ。分かるのは吸血鬼とやらに殺された前の自分と彼、立秋昭人は友人関係になかったという事だけ。

思い出せないのは自分の事だけだ……。

昼休みになると、案の定立秋は私のところへやってきた。

私は売店で買った袋入りのハンバーガーを自分の席で食べていた。「みんなさ、二里さんが例の事件に遭遇したんじゃないかって、噂してんたんだよ。本人を目の前にして噂って言うのもなんだけど」「例の事件？」

そう、と立秋は頷いた。今も彼は前の席に座っている。

「近辺で起こってる連続殺人。冬休み明けにもあっただろ？ 駅前の大通りから路地裏入ったところ。警察も早く犯人を逮捕してほしいもんだね。ここらって度々物騒な事件起こるよな」

「――それ、本当に巻き込まれてたらどうする？」

立秋はきょとんとした顔で、私を見た。

「巻き込まれてたら生きてないだろうよ。生存者の話って聞かないし。というか連続殺人ってだけで具体的な報道はされないし。現場見たって人の話だと、血の海だったらしいよ。」

まあ勝手な噂してたのは悪かったよ。結構ビビってんだみんな。

身近な所だからな」

そう、と返して、私はハンバーガーを口にした。チェーン店のハンバーガーも好きだが、こういったコンビニで売ってるような小さいものも好きだった。

「実を言うとき、少し気になってるんだ。事件の事。今、俺の家子ども預かってるんだ。一応親戚の子なんだけどさ、両親が例の事件の被害者だって。だから、二里さんが巻き込まれたかも、って噂立った時、あながちありえない話じゃないって思ったんだ。杞憂だったけどよ」

「その子も襲われたの？」

「いや、紺哉（こんや）のやつ、ああ、紺哉っていうんだけど、アイツは家で留守番してたんだと。そうしたら両親が帰ってこなかったんだ。まあ、警察から連絡だったりってのがうちにも来て、アイツは今俺の家にいるわけ。

でもまあ、可哀想な事だけどさ、うちの両親、今紺哉の引き取り手探してるのさ。世知辛いな、世の中はよ」

私はほんの一瞬だけ、その子も襲われていたならば、と考えた。悪意からではなかった。ただただ、私と同じような境遇であるなら少し会ってみたかった。

まあ、どちらにしても酷い思考だ。

だがそこでふと思う。

私のような人は他にいるのだろうか。

例えば、事件の生き残り。

あの場にいたのは私と、吸血鬼と、郎十郎が鬼と呼んだ男。

そうだ。あの鬼は今、どうしているのだろうか……。

右門侘助

一

八郎十郎がこの街に居を構えたのはごく最近の事だった。東京に雪が降った去年の十二月の事。郎十郎は、一つの依頼を受けてこの街へやってきた。

それは食人鬼の始末。

食人鬼といっても、地獄絵図に描かれるような腹の出た子鬼の事ではない。犯人はただの人間だ。

しかし、社会は人を食うような輩を人間とは認めない。故に食人鬼。

昨今に起きている事件の元凶の退治こそが、郎十郎の仕事だった。本来であるならば、人を食う異常者なんてものは警察の仕事であるのだろうが、しかしこの仕事は、自らが行うに相応しいと郎十郎は確信していた。

人目のつかない路地裏や深夜の公衆トイレで行われる人間の解体。それも一人を殺すのならまだ分かるが、決まって被害者は複数だった。

問答無用に連れ込み、声を上げる間もなく殺し、人に見つかるより迅速に解体し、決まって破片からはたった一種類の唾液が付着している。

刃物を使った形跡を見せず、何がしかで乱暴に引きちぎったような派手な損壊。

何か特殊な機材を使った、複数による犯行、とする所だろう。何より大人二、三人分の肉を食うのは、例え食い残しがあろうとも一人の胃袋に入るとは想像しづらい。

しかし、郎十郎の頭の中にはある程度の犯人像が浮かんでいた。犯人は単独。人間を容易く引き裂く膂力を持ち、並外れた食欲に

突き動かされた化け物。もしかしたら、暗示能力などもあるかもしれない。

そんな化け物が實在し得る事を郎十郎は知っているからこそ、この依頼を受けていた。

常識から外れてしまった者は、化け物になる。人を食うようになったから常識から外れたのか、常識から外れたから人を食うようになったのか、どちらかは分からない。

総じて、郎十郎のようにそれらを知っているものは、そういった常識外の連中を化け物と呼んでいた。

日が落ち始めた頃、郎十郎はマンションを出て、駅方面に向かって歩いていた。

前が見えているのか分からないほど目元を前髪で隠した郎十郎は、少し汚れた白衣のポケットに手を入れながら、ゆったりと歩いている。

歩いていると自転車に乗った老人や、買い物帰りの主婦たちとすれ違う。

凶悪な事件が起こっていても、さほど変わらないものかとも郎十郎は思ったが、それでも子どもの姿は見なかった。

駅へ向かう大通り。郎十郎はそこを歩いている途中に、道をそれて路地裏へ入った。元々の目的地は、駅ではなくここ。二里凜が一度目の死を迎えた、五回目の殺人現場。

路地裏に入った瞬間に、より暗くなる。確かに、人目につかない場所だった。ここですら容易に食事をできたのだろう。

奥へ進んでいくと黄色い規制テープが張られた一角があった。

「ここが現場ね……」

血液の残り香を郎十郎は幻覚した。ここでの犠牲者は五人と郎十郎は聞いていた。

殺される事に理由はない。その日、出会ったか出会わなかったか、ただそれだけで殺されたのだろう。

ポケットにいれた煙草を取り出し、火をつけようとしたとき、郎

十郎は幻ではない、本物の血の匂いを感じた。

背後から足音。

「お前警察か何か？」

振り返ると、サッカーボールくらいの塊を小脇に挟んだ男が立っていた。男の生首だ。

どこかみすばらしい雰囲気な男だ。髪は寝癖なのかボサボサで、不健康そうな鋭い目つきでもって郎十郎を睨み付けていた。

「馬鹿な事聞いた。白衣にナイフ仕込んでる人間が警察な訳ねえか。それじゃ、神父か坊主か、はたまた退治屋か」

「退治屋に近いな。本業は呪医で、家業は破魔師さ。破魔師なんて、胡散臭すぎて言いたくもないが」

ジツと葉っぱの燃える音が響く。続いてため息の音。

「その首、もしかしてここ最近の犯人？」

「ああ、やっと仕留めたんだ。一ヶ月以上も追いかけて回した。おかげでお前みたいのが街に来ちゃった。意味ねえな、これじゃ」

意味ないね、と郎十郎が相槌を打った。煙草を吸いながら、前髪に隠れた目で男を観察している。

「お前がここを縄張りにしてる鬼か。鬼がいる、とは聞いてたけど案外若いんだな」

鬼と呼ばれた男が抱えた首を郎十郎に投げ渡した。郎十郎は嫌な顔一つせず、受け取った。ぐるぐると手の中で首を転がして、興味深そうに見入っている。口の中に指を突っ込み、ほう、と呟いた。

「血を吸うなんて言うから吸血鬼かと思ったが、本当に吸血鬼なのか。牙がある。肉も食ってるようだから何か別のかとも思ったが、いや、食ってるのはお前か？ 鬼よ」

「いいや、食ったのも吸ったのもソイツだ。後始末してたのは俺だけだな。その首やるから俺の事は放つといってくれ。わざわざやりあうのは面倒だ」

「——ん、まあこれ以上被害がでないなら、お前かこの首か、どっちが犯人であっても構わん。これ以上続くなら今度はお前を消せば

いい」

「そうかい」

そう短く答えた男が、用件を終えたとばかりに立ち去ろうとするのを郎十郎は呼び止めた。

「ああ、吸血鬼っていうなら一応、聞いておくが、繁殖させてないだろうな」

男が振り返り、睨む。

「繁殖？ 血を吸われただけの奴は心臓を破壊しておいた。俺の知っている限りだが」

「ふん、そうか。お前、名前は？」

「――右門侘助だ」
うもんわびすけ

二

右門侘助との邂逅から三週間が経ち、すでに二月が終わり三月へ変わった。郎十郎はパイプベッドとデスクしかない自室にて、煙草を吹かしながら今後を思案していた。

二里凜にはすでに、事件の終息を伝えていた。お前の心臓を抉った男にあったぞ、と伝えたと、あれも私と同類か？ と聞かれた。

そうだ、と簡単に郎十郎は答えた。

人間は常識によって守られている。心の奥底、水面下で無意識に繋がっている人類は、そこで共有する認識、常識や概念を確かめあって互いを人間だと意識する。集合的無意識とは種を判別する為に必要な物だ。

凜のように。恐らく侘助のように。一度他者と常識を共有する事が出来なくなると、それはもう別種の生物のように感じられてしまう。鬼も吸血鬼も、化け物と一括りにしているが、それはもう鬼という生物、吸血鬼という生物なのだろう。

そう言ってしまうなら、厳密には凜と侘助は別種だ。

だが郎十郎はそう言わず、同類と伝えた。

郎十郎には、凜が同胞を求めているように見えたからだ。人と共有する概念がないというのは、孤独だ。言葉が通じない事に等しい。それは同じように常識の外側にいる郎十郎ならではの気遣いだった。ここに、侘助という人物が信頼できる人物かは関係がない。

何せ、それが友人関係ではなく、敵対関係であっても問題はないと考えていたからだった。

郎十郎は部屋の角に置いたデスクに向かい、依頼者に送る書類の作成をノートパソコンで行っていた。

一息いれようかと煙草を山盛りになった灰皿に押し込んだ。窓を見るとすでに辺りは暗くなっている。郎十郎は携帯を手にとると、ピザ屋へ電話をかけた。ノーマルなピザSサイズを一枚と、サイドメニューにあったハンバーガーを一つ、それとドリンク。飲み物をデリバリしてくれるのはピザ屋くらいだな、と思いながら通話を終えて、郎十郎はデリバリ到着を待った。

すると、すぐに部屋の呼び鈴になった。ピザ屋が来るには早すぎる。そう思い、郎十郎は無視する事にしたが、次には玄関の開く音が聞こえた。

「またあの娘か」

郎十郎の部屋に勝手に上がりこむのは凜しかいなかった。

コツコツと四歩分、家の短い廊下を硬い靴が叩く音がして、郎十郎のいる自室のドアが開いた。

現れたのは予想通り、凜だった。

「お前、ここを喫茶店と勘違いしているんじゃないだろうな？」

「こんな埃っぽいところで食事なんてしたくないよ。前から思っていたが何より寒い。ストーブくらい置いとけ」

そういうと凜はベッドに腰掛けた。

「それで、今日は何用だ」

「一つ気になる事がある。吸血鬼に噛まれた人間の事だ」

郎十郎は新しく煙草に火をつけた。

「――リビングデッドの事か？ 有体に言えばゾンビのような物だろうな。生きている死体というのが、少し違う。死体を操り人形のよう動かすイメージだ。そこに噛まれた側の意識は存在しない。

でも吸血鬼なんてのはレアだからな。本当にこれが合ってるかは分からないし、能力なんて個々人で違うもんだ。何か気になる事でもあったか」

「……」

凜はそうして押し黙った。郎十郎も追求する事なく、ピザ屋の到着を待つ。

不意に、来客を知らせる呼び鈴が鳴った。

「うん、まあ、面倒な話は後にしてくれ。その前に食事だ」

郎十郎が財布を持って玄関に向かった。ピザとハンバーガーとドリンク。貨幣と引き換えに受け取って、部屋に戻る。

自分のデスクの上にピザを広げて、まずは一口。

「お前も食うか？ 埃っぽい所で悪いけどな」

断るだろうと打算をつけて郎十郎は凜に聞いた。しかし、郎十郎の思惑は外れて、凜の目はハンバーガーに向いている。

「そっち、ちょうだい」

「……普通この場合はピザをもらうだろう。一品物のハンバーガーを持っていくな。まあ、別に構いはしないが。第一、普通を求めるのも酷な話か。ほら」

凜にハンバーガーを渡す。がさがさと包みを剥がして、凜がそそくさとハンバーガーを齧った。

「もしかしてハンバーガーが好きなのか？」

凜が頬張りながらコクンと頷いた。

「落ち着いて食えよ。ねずみみたいだ」

言って、郎十郎も食事を始めた。凜が食べ終え、郎十郎が食べ終わった頃に、ぽつぽつと外では雨が降り出していた。

「さて、リビングデッドの話だったな。一般には日の光で灰になるという弱点があるが、それは誤りだ。そういった弱点を持つ能力で

ある、というのなら話は別だが、大体はそれらしい弱点はない。尚且つリビングデッド自体に繁殖能力、つまり新たなリビングデッドを作る能力もない。文字通り、死体を操るだけだからな」

「操っていた吸血鬼が死んだらソイツが作ったリビングデッドはどうなる」

「ただの死体になる。能力の行使者がいなくなるんだ。言ったら、リビングデッド自体に意識はないと。繰り手がいなければ人形は動かん。もしまだ動く個体があるならソイツはリビングデッドではなく、吸血鬼なんだろうな。そっちには自由意志もある。」

もし吸血鬼なら、血を吸われても尚死ななかったんだろう。お前と同じ異常に触れて、異常に堕ちたんだ。その境目は死んだか、生き残ったかの差だけ。お前みたいに死んだのに生き返るなんてのは特上だよ。

——まさかとは思うが、いるのか？ 吸血鬼」

その問いに凜は首を振った。

「そういう訳じゃない。ただ気になったただけだ。それだけが聞きたかったから、もう帰るよ」

「雨降ってるぞ」

「傘ならある」

言って凜が立ち上がった。こつこつとローファーで床を鳴らしながら部屋を出て行く。郎十郎は椅子に座りながらそれを見送った。

「嫌な予感がするな」

郎十郎が呟くと、呼応するように携帯が鳴った。pipipiと鳴り続ける携帯を手に取りながら、郎十郎は応答するのに気後れしていた。しかし、無視する訳にもいかない。仮に嫌な知らせだった場合、ここで無視をしても回りまわって結局は自分の所へ帰ってくるからだ。

電話の内容は、やはり郎十郎の予測通りに、六件目の殺人が発生した、という知らせだった。

三、夢魘

魅力的な香りに誘われるように、ゆっくりとした足取りで真つ暗な道を歩いていた。

身体を動かすのは、俺の意思ではない。人形師にでも操られるように、身体は勝手に歩いていく。

どこまで続くか分からない道を、ふらふらといく先に人影が見えた。人相などは見えない。ただ、周囲の暗闇を固めて作った泥人形のように。それが男だろうと、女だろうと、関係のないことなのだ。それが、人間の形であるならば。

やめろと叫んだ。精一杯の、抵抗の意思を見せたかった。

手にナイフを持って、背後から忍び寄る。腕を高く振り上げ、勢いよく、ナイフを首筋に叩き付けた。

嫌だ。

ナイフは首筋から斜めに腹部まで、深く深く切り裂いた。人形は軟らかかった。

そして、人形から鮮血が噴き出す。それを全身に浴びると、俺はもう、嫌などと思わなくなった。高揚感に近いものに包まれる感覚。心地いい。

気持ちがいい。

暖かい液体に包まれ、豚児のようにはしゃぐ。

身体に塗りたいくる。手の器に溜める。絵を描く。衣服にわざと染み込ませる。

足りなくなれば、人形を再び抉る。突き立て、弾き、最後は手を差し込んで、袋を開くように広げる。

笑みが零れる。

今度は手で血をすくい、口へ運ぶ。

こつこつと喉を鳴らす。飲み干して、またすくう。

繰り返し繰り返し、そしてようやく袋は空になった。すでにそれ

は人の形だったものとは思えないくらいの、ただの残滓となっていた。

気づくと、手が震えている。

気づくと、涙が零れている。

いたずらのばれた子どものような、幼稚な動作。ただ泣いて、泣いて、救いを待つ。

化物にはなりたくなくて。

俺はヒトでいたくて。

人間としての縁からは外れても、その境界だけは越えたくない。

大丈夫、これは夢だ。

自分にいい聞かせる。本当は夢かどうか、定かではなかった。ただ、いわずにはいられなかった。

もしこれが、現実ならば。

すでに俺は化物に落ちているのだから。否……

血を望むなんてことが――

考えないように、意識しないように、そうしてきた思いが噴出した。頭を振って、忘れようとする。いつからなのか、身体は自由に動いていた。

――もうすでに、化物じゃないか。

授業も終わり、教室に人の影はまばらとなった頃、私はゆったりとした動作で帰り支度をしていた。

今日は雲ひとつない天気だが、季節柄まだ寒い。私は制服のほか、セーターも着ていないせいで、外に出るのが億劫だった。

そうしていると、声を掛けてくるのだ。あいつが。

「二里さん、もう帰るの？」

立秋昭人。ここ最近、いや、初めて声を掛けられた日からほぼ毎日、こいつはこうして私に話しかけてきた。

鬱陶しい、と思いつつも、それを避ける為にいそいそと帰るのも逃げるようで腹立たしいから、こうして気にせずにした。

「用事があるから」

手に鞆と傘を持って教室を出ようとすると、立秋は不躰に私の腕を掴んだ。

「……少し待ってよ、話があるんだ。大事な話が」

こいつ、何だ？

いつもと様子が違う。視線に落ち着きがない。私の首、肩、腕、腹を見ている。

掴まれた腕が痛い。ずいぶん力で絞められている。

「急いでるって言ったけど」

そう言うのと、漸く立秋は腕を放した。

「……そっか。そうだな。ごめん、また来週に話すよ」

「お前、喉でも痛いのか？」

「え？」

「ずいぶんとしきりに唾を飲んでるようだから。いや、どうでもいいか」

興味はない。そう意味合いをこめて廊下へ出る。今日はまっすぐ帰ろうか、郎十郎の所へでも行こうかと考えながら昇降口が出る。

郎十郎からいつか聞いた事を思い出しながら歩いていく。

世の中には、人間とヒトと化け物がいるらしい。人間は文字通りの意味。ヒトとは、人間としては生きていけなくなった人、つまりはどこかずれてしまった人の事を指すらしい。

最後に、化け物。人間どころかヒトからも外れてしまった存在。墮落した化物。けもの

ヒトまでなら社会の片隅に住めるし、昨今の社会にヒトは無自覚でもたくさんいるらしい。私のように分かりやすくずれてなくとも、些細なずれを持っているヒトたちが。

しかし、そこからたった一步飛び出すと、たちどころに居場所がなくなる。シリアルキヲなんて呼ばれる連中や、会話すら成立しない連中。ヒトはそういったものになる可能性を孕むという。

とはいっても、それは人間も同じだ、と郎十郎は纏めていた。要は異常者が異常者足らしめるもつともらしい言い訳がほしいんだと自分は化け物だから人を殺しても良い。化け物だから人を殺すのは当たり前だ。

そんな自分も騙せないような言い分でヒトは化け物に堕ちる。

そうはならないようにしなければならぬ。

ふと、視線を手に持った傘に向ける。

今日は白い傘だった。

傘があるのなら、きっと私は大丈夫。

堕ちる理由が簡単なものなら、堕ちない理由も簡単なものでもいいだろう。きっと、誰かに堕とされない限りは。

考えるのをやめて歩く事に意識を向けると、背後に気配を感じた。少し離れた場所にこつこつと音をたてている。

鬱陶しくも立ち止まる。立秋の奴だろう。様子もおかしかったし。

「何のつもりだ」

と振り返ると、そこには立秋ではなく、別の男が立っていた。いつかの雨の日に見た事がある、長身の男。郎十郎曰く、鬼の男だった。

「――お前」

「何のつもりだはこっちの台詞だ。俺はしっかり心臓を潰したんだぞ。始末したと思ったら生きて人を食ってるときだ。どっかの白衣に解決したなんて言っちゃった手前、俺が犯人とでも思われたら面倒じゃないか。ああいう連中ってのは殺しても次が来るから相手したくないんだ。心臓壊しても無駄なら、あの吸血鬼みたく首をもつていけばいいのか？ 戦国武将みたいだな」

言って、男がゆらりと動くと、

「なっ！」

男がいきなり目の前まで移動し、肩を万力のような指で掴まれていた。

どんっという衝撃を背中に感じたときには地面に転がされていた。思わず呻く。

周囲が薄暗い。路地裏かどこかに引き込まれたよう。いや、投げ込まれたようだ。投げ飛ばされたというのに、私の体は何一つ反射を返さなかったのか手にはしっかりと鞆と傘が握られたままだった。

「吸血鬼との鬼ごっこはもう飽きたんだ。手早く済まさせてもらう」男がごきりと腕を鳴らす。

「――何なんだお前は！」

「俺か？ 右門侘助。ただの鬼だ」

吸血鬼

いつかの殺人現場と同じような場所。昼間だというのに日の光は囲むように建設された建物によって遮られている。ここだけが夜のように。

荒事には持ってこいの場所だ。角を曲がった先には大通りがあるが、きつとこの場の異常に気づくものは誰もいない。

人間は危険を忌諱するものだから。

それを分かっているこの男は、私をここへ連れ込んだのだろう。ここなら殺せる。

路地裏の出口を塞ぐ位置にあいつは立っている。少し腰を落として、いつ飛び掛ってくるか分からない構えだ。私の背後は行き止まり。青いポリエステルの大きなゴミ箱が数個置いてあるだけだ。

ドクドクと心臓の脈打つ音を感じる。正面を見据えて、手に持った傘をせめてもの武器として向ける。

「お前、何が目的だ」

「さっき言っただろう。これ以上殺されたら堪らないんだ」

どうやらこいつは勘違いをしているらしい。私が人を殺して回ったと。

「事件は解決したって聞いたぞ。お前、郎十郎に会ったんだろう。お前が吸血鬼を退治したって」

そういうと、んん？ と声を上げて男が構えをといた。郎十郎の名前が利いたか。

「お前、あの白衣のお仲間か？」

「違う。違うけど、違うない」

詳しく説明するのは癪にさわる。私がこうなった原因の一端はこいつにもあるだろうし、何より自分の事を知らない奴に話すのは嫌だった。

「なんだそりゃ。お前、吸血鬼じゃないの？」

「違う」

「じゃあなんで生きてんだ。心臓抉ったよな」

「知った事か。お前には関係ない」

「ふーん。まあ確かにそうか。関係ないな」

軽薄そうな物言いに少し苛々とする。私はこいつが嫌いだ。

「それで。どうするつもりだ？ 人の事を投げ飛ばしておいて、何もなしじゃ納まりがつかないぞ」

「なんだ、殺し合いでもしたいのか。やめとけよ。傘突きつけてるくらいなんだ。化け物同士の殺し合いは基本的にお咎めなし。つまり、面倒事になり得ないならやっちまってもいいんだぜ？」

「誰が化け物だ。確かにお前は素手で人を殺すような化け物なんだろうが、私は違う」

と言ってやると、男は笑い出した。あんまりに男が大笑いをするので、ぶん殴ってやろうかとも思ったが、今はやめておく。

「なんだそれ。ヒトのつもりか？ さすがに蘇生するようなヒトはいないだろうよ。それだけで十分だ。化け物としてはな。殺したくないか？」

理由もなく苛々して、でもその苛々を解消する方法が漠然と理解できてるんだ。殺してしまえば正常な自分に戻れる。我慢をやめれば解放されるってよ。どうだ、そういう感覚、ない？」

要は、潜在的に殺人衝動があるかないか、という話だった。

私は、あの日から今までに殺意を持つほどの感情の起伏を体験した覚えがない。それが元々そういう冷めた人間だったのか、おかしくなつたせいなのかは分からなかった。

ないと答えると男は疑うような目を向けてきた。

「本当にヒトに踏み止まってるのか？ そりゃ難儀な事だな」

こいつにとってヒトでいる事はツライ事なのか。

自分で自分を鬼、化け物と呼ぶくらいだ。嬉々として堕ちたに違いない。今はずいぶんと近い距離にいるが、こいつが本質では私を殺した吸血鬼と同じだという事を思い出した。というより、事実こ

いつにトドメを刺されている。

そんな奴相手に悠長に会話してる時点で、異常だ。私も、こいつも、今この場さえも。

それでも私はこいつに、話を聞いてみたいと思っていた。

「お前は どうして鬼になったんだ？」

「おかしい事を聞くな。さっき自分で言っただろう。関係ないって。自分で喋らず人に喋らすなんてそんなの、通らないだろうよ。まあいいや。白衣と知り合いなら伝えとけ。昨晚のは俺じゃないってな。俺はその犯人を捜すだろうから、邪魔すんなってな」

そういつて、男は大通りへと戻っていった。

何だったんだ。理不尽っていうのはまさにこれか。

今度会ったら殴り飛ばしてやる、と密かに決意して、男が言った白衣とやらの居場所へ向かう。

郎十郎を殴り飛ばす理由も、少なからずあるかもしれない、なんて思いながら、大通りを歩いていった。

郎十郎のマンションまでやってくると、入り口に白衣を着た男が立っていた。街中を白衣で歩く奴なんてのは郎十郎しか私は知らない。

「悪いが今日は八医院は休みだ。帰ってくれ」

と、開口一番に言い放った。珍しい事もあるもんだと思いつこへ行くのか尋ねてみた。すると、郎十郎はぼつが悪そうな顔した。

「鬼の奴を探さなきゃならん。連続殺人は解決したなんて言ったが、昨日一人殺された。鋭利な刃物で解体されたらしい。今までの殺人とは方法も犯人も違うが、恐らく地続きだ。どっかの誰かが新たな化け物に堕ちてしまったんだろうな」

「それって、抵抗しなかったのかな。化け物に堕ちるって嫌な事じゃないのか？ 右門侘助だったか、あいつも楽しそうに自分を鬼と言っていた。今殺人を起こしている奴も、楽しくてやってるのか？」

郎十郎が眉根を上げて驚いた顔をした。一回ため息をつく白衣のポケットから煙草を取り出して、火をつけた。確かこの区は路

上喫煙は罰金の対象だった事を思い出す。

「お前、右門侘助にあったのか？　なるほど。予想は出来た事だったな。吸血鬼と勘違いされて襲われたか。お前はあいつに心臓を潰されたんだったな。忘れていたよ。そりゃ俺の不手際だ」

そう言われて、忘れかけていた郎十郎を殴ってやりたい気持ちが再発した。

「肩を掴まれて思いっきり投げ飛ばされたぞ。肩が外れるかと思った。おい、悪いと思ってるなら一発殴らせろ。むしろくしゃしてるのを思い出しちゃった」

郎十郎は私の言葉にごめんだね、と答えて、携帯を取り出した。

「定時連絡の一つでも入れておくか。――いや、やっぱりやめておこう。どうせ怒鳴られて終わりだ。この件が終わるまで黙っておくのがいい。うん。」

で、凜。侘助とやらは何か言っていなかったか。俺はやってないとか、犯人を捜してくるとか、痴漢を疑われた奴みたいな態度してなかったか？」

「言ってた。犯人を捜してくるから、邪魔するなって。一体あれはどういう奴なんだ。私を殺した奴だぞ」

「どういう奴かは知らんね。俺と敵対する気がないって事だけは分かっている。後は鬼と呼ばれている事くらいか。鬼って言うくらいなんだから、人を食うんだろうな。やっぱり。人食い鬼。日本でもっともポピュラーな化け物だと思わないか？　でもここに長いこと住んでるって話なんだが、ここで事件が起こったのは件の吸血鬼による殺人が初めてだ。本当に何なんだろうな。アメコミのダークヒーローのような奴なのかも知れない。そんな玉じゃなさそうだが。でも、化け物が化け物退治をするなんて、それっぽいだろう？」

さて、あいつの事はひとまず置いておこうじゃないか。議論しても始まらない。第一、ある程度話の通じる相手のようだから、本人に聞けばいい。次にお前の質問に答えるでしょう。

化け物に堕ちる感覚は、大体は抑圧してきた感情を解放する事に

繋がる。それから考えれば、堕ちる事は気持ちがいい事なんだろうな。まあ、抵抗しようと思えばできるだろうさ。我慢すればいい。だが、今回の犯人に関しては別だ。

恐らくだが、堕ちる事に抵抗なんか出来なかったんじゃないかと俺は考えている。

抵抗というのは、自分に襲い掛かる物を認識していて、初めてできる行動だ。他から掛かる力に対して、張り合い、退けようとする事を抵抗という。

なら、襲い掛かる力に気づかない場合、どうなるだろうな。本人は殺人衝動がどこから来るか、なんて想像さえもなかったろう」

「どうということだ？」

「犯人は自分が化け物だと思っていなかった。知らなかった。

右門侘助は吸血鬼が人を襲う度に生き残った犠牲者を殺していた。お前の時のようにな。これには意味がある。

生き残った場合、お前のように化け物一步手前の状態になるからだ。分かりやすく言えば、吸血鬼に噛まれた人間は吸血鬼になる、という事だな。リビングデッドは動く死体。なら、生きていたらどうなるか。それが吸血鬼だ。血を吸わなければヒト、血を吸った後なら化け物と呼んでいい。

侘助は新しく生まれるだろう化け物が馬鹿な事をするのを恐れて、処理していた。自分の縄張りで凶行が行われれば、必ずそれを解決しようとする動きがでてくるからだ」

「――その駆除に洩れた奴がいる」

「ご名答。恐らく最初、一件目の時だろうな。それ以降は侘助が処理したんだ。ただ、一回目だけは知らなかった。その時に生き残りがいた。生き残った奴が吸血鬼に襲われた事を夢か何かかと納得して今まで生活をしていて、自分の中に湧き上がる感情に気づかないようにしていたんだろう。どういった衝動をもったかだが、今回の事件を見るに血を見たいか、血を飲みたい、だろうな。そこに自分で気づいていたなら、我慢しようと思うことで抵抗できただろうさ。

だが、それに気づかなかった場合どうなると思う」

「……分からない。暴走する、か？」

「近いな。それはな、無意識のうちに実行してしまうんだ。例えば人を殺す夢を見る。本人は夢の中で殺しているつもりでも、実は現実で人を殺していた、なんてな」

「そんなのありえるのか？ それじゃあもう意識なんてないじゃないか。寝ていたとでも言うのか？」

「その通り。寝ていたんだろう。でもな、人間は寝ていても走り回ったり、物を食べたりする事だってあるんだぞ？ 睡眠時遊行症。夢遊病というのが一番有名か。良くある話だ。」

我慢というのは、ただひたすら耐え忍んだって意味はない。そこに代償行為が存在しなければ継続なんてできるもんじゃないのさ。内からくる強い衝動に抵抗するなら、ちゃんと理解し、対策をたてないといけない。そうしないと、過度なストレスとなって、どこかで爆発してしまう。たしか、夢遊病の原因の一つにストレスがあげられていたな。

まあでも大事なのは夢遊病という事じゃない。そうじゃなくても、違う形で殺人は起こしていただろう。どこから来る衝動なのかを理解していないとダメなんだ。よく分からない衝動、欲求というのに人間は弱い。否定する材料がないからな。自分自身が吸血鬼になった事に気づかず、吸血衝動は日々膨らんでいく。いつ爆発するか分からない膨らみ続ける風船を抱えているようなものだ」

「吸血鬼になった事に気づかないまま、日の光とか浴びて死んだりしないのか？」

「それもない。日を浴びて焼けるのは生粋の吸血鬼だけだろうよ。どこまで行っても元人間の吸血鬼は血を飲みたがるただの人間でしかない。たとえば壁をすり抜けようと、こうもりに変身しようと、牙が生えようと、それは吸血鬼を真似ただけの、化け物に堕ちた時の代償として得た超能力に過ぎない。能力だったただの劣化だろう。」

超常的な力というのは確かに存在するんだ。だけど、常識という

檻が邪魔をして表面に出てくる事はない。だが、集合的無意識から完全に切り離されたヒトや化け物にはその檻がない。お前だって例外じゃない。何かしらの力はあるだろう。本来なら吸血鬼なんて呼ぶべきでもないのさ。偽者なんだから。

問題は、一度化け物に堕ちてしまつたら二度とヒトには戻れないという事だ。次も無意識か、意識的にかは分からないが、退治しなければまた続く事になる。この事件はな。

そういえばまだ聞いていなかった。お前はヒトであるが、一体どんな衝動を内包しているんだろうね」

話は終わりだ。そう言って、郎十郎はどこかへ行ってしまった。吸血鬼を探しにいったのだろう。

私はそのまま家に戻らず、少し街を歩く事にした。吸血鬼を探す。そんな明確な目的じゃないが、もし会えるなら。

堕ちてしまった気分を聞いてみたかった。

凜

「邪魔しないよう伝えろって言ったのに、なんでお前がここにいるんだ」

「人任せにしたままだとクライアントに怒られる。まあ、個人的な事情という奴だ」

人気のない暗い道路。二人の男が車の通る気配のない車道の真ん中に突っ立っている。

この日より二人は夜を徘徊する事になる。犯人を探す為に。事件の解決はほど近い。



週末の休みが明けてしまったが、吸血鬼を見つけたという話はいまだに聞かなかった。

私自身も夜に探しまわっているが進展はない。

生活なんてものは捨てて、吸血鬼探しを優先したいが、昼間を出歩くことに意味はない。両親の目もあり、仕方なしに学校へきていた。

すると、机の中に手紙が一通。差出人の名前を見て、ため息をつきたくなった。

夜に、隣町の運動場で。立秋昭人からのメッセージは、たったそれだけだった。

まだ授業中だというのに、立秋昭人の姿は教室にはない。この手紙はいつ入れたものなのか、と暇つぶしの思考をしながら、下校時間待った。

——静、とした空気が辺りを包んでいる。

すぐ傍には公営団地があるというのに、人の気配はまったくない。

金網で囲まれた運動場の奥底は、傍を通る道路からはあまりに暗く伺えない。

二里凜は、そんな異界のような場所へ足を踏み入れていた。

学校の制服のまま、片手に水玉模様の傘を持っている。運動場の外周は草で覆われ、手入れは行き届いていないようだ。ローファー靴でしゃりしゃりと芝生を踏む感触を鬱陶しそうに足下を見渡しながら、凜は約束の人物の到着を待っていた。

時刻はすでに午前二時。はたして本当に今日だったのか、日付も時間の指定もなかった、と若干の後悔をしていた。

だが、凜は帰ろうとはしない。一定の確信を得ているからだ。

誰かが自分を見ている。季節柄冷たい空気の中に、粘るような何かを感じられていた。

あとは、それが姿を現すのを待つだけ。

空は暗い曇り空だった。なけなしの月明かりさえも与えられず、遠くにあるはずの街灯すら見えない。住民の寝静まったであろうこの一帯は、風もない、音もない、光さえもない、まさに静止した世界だった。

足下から視線を周囲へと向ける。暗闇の中に影が一つ。いつからそこにいたのかは凜には分からないが、分かる事が唯一つ。

あれが待ち人で、あれが吸血鬼だ。



雲間から覗いた満月から注いだ明かりが辺りを照らす。映し出されたのは、凜と同じ学校の制服を赤く染めた一人の男だった。

「最初はさ、ただの疑問からの興味だったんだ。このクラスに二里さんのような不思議な雰囲気の人間なんていたかな、って。でも、

それから段々と違う感情が芽生えてきたんだ……。ああ、言い忘れてたけど、来てくれてありがとう。二里さん」

立秋昭人が普段通りの口調で話すのを、凜はもはや不自然に感じていた。血だらけの服を着ながら、なぜこうも落ち着いているのか。「一体何のようだ。私の血でもほしいのか？」

凜の言葉を聞いて、昭人は笑顔を浮かべて正解、と言った。

「自分でもよく分からないんだ。二里さんと話をしているうちに、君の血がほしくなって、最初はただの気の迷いだとも思ったけど、どうやら違ったみたいだ。いつの間にか、俺は人を殺していた。吸血鬼みたいだろ？　ぼんやりとしか思い出せないが、なんとなく、俺も血を吸われたのを覚えてる。」

でも、だから二里さんの事が気になったのかも知れないな。本当の所は、君も襲われたんだろう？　確か二里さんって、もっとおとなしい人だったよ。いつも教室で本を読んでる、おとなしい子」

「ふーん。学校での私の様子を教えてくれたのはお前が始めてだ。参考にさせてもらおうよ。でも、本なんて興味が湧かないな。それに部屋にだって本なんてあったかな。」

それでさ、実は私もお前に聞きたいことがあったんだ」

「何？　何でも答えるよ」

「化け物に落ちるってどんな気分なんだ」

「おいおい、化け物なんて酷いな。二里さんだって同じだろう？」

「違うね。私は化け物じゃなくて、ヒトだ」

「――血がほしいって、思わないのか？」

「私はお前とは違う奴に殺された。私は吸血鬼じゃないよ」

ふらりと昭人がよろめいた。信じられないものを見た、とでもいうように顔を手で覆い、指の隙間から凜を覗いている。

空気が段々と粘り気を増していく。じんわりと汗が滲んでいるのを凜は感じていた。

これは、きつと殺気とでも言うものなんだろう。

凜が傘を構えるよりも早く、昭人は疾走していた。

一步、二步、三步、飛ぶように地面を跳ねて凜の目の前に着地し、腕を掴んで動きを封じると、凜の喉笛に噛み付いた。

呻く間もない。

凜が気がついたときには、喉笛を噛み千切られていた。おびたらしい出血で急速に意識が落ちていく。

そうだ。死ぬって、こんな感じだった。

そんな事を思い出しながら、凜は立ち竦んでいた。

即死といえるような傷なのに、時間はとても緩やかだ。首の半分以上を削り取られたのに、凜はまだ倒れていない。ゆっくりと、ゆっくりと、数秒の出来事を引き伸ばしながら死へ向かっていく。

「――しまった、殺しちゃった……。ああ、でも……これが俺の望んでいた事。二里さんの血を飲みたかったんだ。アア、確かにコレは……」

「抗い難い快樂か？」

自分の独り言を取られ、ハッとして振り向くと、昭人の後ろ、十メートル離れた場所に一人の男が立っていた。

表情を隠すためのような長い前髪の、白衣を着た男。片手をポケットに突っ込み、片手は口元で煙草を支えている。

「お前、誰だ！」

「ようやく見つけた。まさか凜が先に出会っているとは思わなかった。しかし、何を考えているんだ。吸血鬼なんかに出会えば殺されるって分かってた事だろうに。おかげでその様だ。前掛けを汚しまくった幼児のようじゃないか。首から下が血でべっとりだ。で、凜よ。一体何の真似なんだ」

現れた郎十郎は、昭人を無視してすでに死体となった凜に語りかけた。生者が死者へと語りかける神妙なものではない。死者が生きていると確信しているそぶりだ。

「二里さんはもう死んでいる、馬鹿かお前！」

「馬鹿はお前だ。首を食いちぎったくらいで死ぬものか。いや、正確には死んでいる訳だが、そいつは心臓を潰されても死なない女だ

ぞ？ そら、見ていろ！ 死者が蘇生していく様など、そうそうお目にかかれるもんじゃない」

郎十郎が促した先には、立ったままの凜の死体があった。首からおびただしい血を流しながら、その死体は一步、一步、と足を動かす。

血がぎゅるぎゅると逆巻き、凜の体に戻っていく。まるで録画の逆再生だ。衣服に付着し染みとなった朱も、見る見る消えていき、昭人の体に付着した染みすら、空を飛んで凜の体へ帰還していった。血液があらかた戻り終えると、首の半分がなくなっていたのに、あつたはずの傷は瞬きをする間に消えていた。

果たしてこの場一番の化け物は誰なのか。

人間の骨すら噛み砕く顎を持ち、人間の目に捉えられないほど早く動ける吸血鬼。それすら霞む。

昭人の目の前には——死より甦る少女がいるのだ。

闇の中、ゆっくりと開かれた少女の双眸が昭人を睨んだ。

「——まずい」

そういったのは郎十郎だった。

それはきつと、先ほどまでとはまるで違う空気を纏った少女を見ての言葉だろう。

少女の足下に生えた芝生が音を立てて枯れていく。水に広がる波紋のように、それは少女を中心にゆっくりと広がっていった。その様は、何かを少女が吸い取っているようにも見えて取れる。

「命を吸っている……それがお前の欲求、失った命の補完が望みか、まさに死神じゃないか、凜——」

郎十郎が言いかけると同時に、少女は跳ねた。地面とは水平に、まっすぐに昭人へ向けて。

「なっ！」

それは化け物に相応しい身体能力だった。互いにぶつかる直前に、

少女は傘を突き出した。今までもっていた傘とは違う、一度ももっていたはずのない、赤い傘布の番傘。頭ろくろと呼ばれる傘の先端が、昭人の右肩に突き刺さった。

「お——前、なんだ、二里……さん？」

それに少女は答えない。変わりに、昭人の腹に少女の足が伸びていく。

ドン、というおよそ蹴りとは思えない音が響き、昭人は車に撥ねられたマネキンのように吹っ飛んでいった。地面に数回叩きつけられ、ようやく止まると、昭人は自身の様に驚いた。

蹴り飛ばされただけで——たったそれだけで、自分はぼろぼろになっている。地面と激突したせいか、右腕があらぬ方向を向いている。驚異的な蹴りを腹で受けたせいか、こらえきれない吐き気がこみ上げてくる。胃の内容物を吐き出すと、そのほとんどは血だ。その血は、一体誰のものなのか……。

「やっぱり……二里さんも化け物じゃないか」

凜が獲物を狙う猫のように頭を低く落として構える。

きつと次にはトドメを刺される。きつと次には殺される。

昭人の脳裏によぎった光景は、しかしもう一人の男によって止められた。

闇を切り裂く白銀の軌道を描いて、一振りの短刀が凜の左足へ突き刺さった。呻いて、少女が地に膝を着けた。

暗闇の中に、ぼうつと煙草の火が浮かぶ。

「愚か者。理性を保て。そのままそいつの命を吸えば、もれなくお前は化け物だ。そいつは、お前が望む所じゃないだろうに」

ふっ、と一息、煙草の煙を吐く。

「第一、やっぱりお前が盗んだんじゃないか、その傘。そいつはただの傘じゃない。妖怪傘だ。おかげで部屋を探し回ってしまった。忘れていたよ。それ、傘にならどんな形にでも変身するんだった」
そういつて郎十郎は凜へ近づく。もう凜の纏う空気は普段のものに戻っていた。

「あ……うう——郎、十郎？」

「目が覚めたか？」

「……手荒い起こし方だ。足が痛い。どうしてくれるんだ」

「もういっぺん死ねばその傷も癒えるさ」

冗談めいて郎十郎がいうと、凜は御免だ、と答えた。

「で、どうする。あの吸血鬼、お前が殺すか？　それもいいだろうよ。化け物を殺すのはいつだって人間の役目だ。酒を飲ませて鬼を切る。銀の弾丸と木の杭で吸血鬼を殺す。数多の弓矢で化け狐を射る。命を吸えばお前が堕ちるが、殺した所でどうにもならん。どうする？」

凜が双眸を昭人へ向けた。先ほどとは違う、迷いのある目だ。

「やめておく。まだあいつには聞きたい事があるんだ」

「まだ、という事はお前、そんな事のために吸血鬼を探していたのか。そんな事のために命を一つ減らしたのか」

「郎十郎が怒る事じゃない」

そういつて、凜は昭人へ近づいていく。短刀の刺さったままになっている左足を引き摺りながら、ブリキの人形のような歩みだった。

「立秋昭人。君、化け物に堕ちて後悔はしなかった？」

その問いに、昭人は答えなかった。体の痛みか、心の痛みか、目いっぱい涙をためて、眉間に犬のような皺を寄せ、鼻をひくつかせている。

その表情だけで凜は、「ああ、わかった」と答えた。

凜はそれだけで満足だといわんばかりに頷いた。

それがなんだか悔しくて。

それがなんだか遣る瀬無くて。

凜の顔が、そうならなくて本当によかった、と安堵しているよう

に見えてしまつて。

昭人は堪らず凜に手を伸ばした。

腰を地面につけたまま手を伸ばしても、凜の足にしか届かない。だが、昭人はそれで十分だった。

未だ凜の足に刺さったままの一本の短刀。郎十郎が投げつけた、銀色の短刀。昭人はそれを掴みとった。

凜が苦悶の声をあげ、飛びのいた。だが、短刀は凜の足から抜け、昭人の手の中にある。

昭人はその短刀を突き入れた。自らの心臓へ。

吸血鬼を殺すなら心臓を穿つ。杭でもなければ弾丸でもないが、銀色の短刀なら上等なものだろう。

そうして、この町の連続殺人は終結する。事件を解決した者はいない。

終わらせたのは、自分自身なのだから。

◇

郎十郎に担がれて、八医院とは名ばかりの薄汚れた部屋へたどり着いた。

この部屋唯一の清潔そうなベッドに寝かされて、足の傷を治療する。医者というだけあって、縫合くらいはできるようだった。

私の足に糸を通す郎十郎は、処置に集中してるおかげで、私の顔を見る様子はない。

「私、分かったよ。自分の欲求が。結局、私は人間に戻りたかったんだ。死んでも甦るなんて変な体になって、そんなのが嫌だったんだ。私の命が六つあって、その二つが消えてしまったから、他所から失くしたものを補えばいいって。触れれば命を吸い取れるなんて、

化け物だね、私」

「その欲求に従ったなら、化け物だろうな。抗っている間はヒト。死神のような超能力を得たって、人間を殺さなければいいだけだ。それに、お前の望みは見事な矛盾を孕んでいる。どうやったって人間には戻れないんだ。命を吸ったって、血を吸ったって、その行動の結末は墮落だ。空しいものだな、凜」

「そうはいっても、現状を維持する事はできるんでしょう？ ヒトと化け物の間を行ったり来たり、そういうのって駄目？」

「いいと思うぞ。別に、好きなようにすればいいさ。安心しろ、化け物に堕ちたって依頼がなければ俺は殺さない。どこにだって行けばいいさ」

郎十郎が糸を切り、「これで終了」と言うと、そのまま私の顔を見ないで立ち上がり、デスクに向かった。

「ねえ郎十郎。立秋昭人は、なぜ私の血を欲しがったんだろう。別に誰でもよさそうなものののに」

「ふん。そうだな、もしも立秋昭人とやらが、お前に恋していたなら話は早い。俺は立秋昭人がどういったやつなのか、お前との関係も知らないから、なんとも言えないんだが。

まあそうだな、愛情表現の行き着く先はカニバリズムと誰かがのたまっていたが、吸血鬼に関しちゃそれも頷ける話だ。喰らうこと、血を吸うことなんて、繁殖行為に他ならない最高のセックスだからな。つまりは、そういう事なんだろう。

それよりお前、雰囲気変わったな。まあ、それも当然なんだろうが。さて、何か飯でも食うか。またハンバーガーでも食べるか？」

「ハンバーガー？ そんなのいらない」

「そんなのってお前、好物だったろ。ハンバーガー」

「——そうだっけ。そう……かな、よく分からないけど。いらないよ」

「そう……か。ま、俺は腹が減ったから、またピザでも頼むさ」

郎十郎は本当に、体に悪そうな生活をしているな。

白衣のポケットから携帯電話を取り出す仕草を眺めながら、同時に部屋を見渡す。

今度、部屋の掃除くらいはしてあげてもいいかもしれない。そんな事を思っていた。

恐らくきつと、何かの気の迷いだろうけども。

■ 第一人格・了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9163t/>

二里凜の人格診断

2011年6月30日03時37分発行